



1980年(昭和55年)

2月号(No.416)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価一部 150円

目次

- 珠穆朗瑪峰計画について(渡辺兵力)(1)
木曾御岳の噴火(式正英)……………(1)
第17回「この一本展」より(一)……………(3)
扶絃日記(不二日記) 桑門在融著
黒部奥山と奥山廻り役 中島正文著
ヒマラヤ山探険 長田秋壽訳
図書紹介……………(5)
『ハントの二冊の本』
『Mountaineering and its Literature』
『上高地逍遙雑誌』『北アルプス』
山スキーについて(上)(登坂信雄)……………(6)
東西南北……………(8)
三水会講演会より 講師 小笠原勇八
お知らせ……………(9)
北海道支部だより……………(10)
追悼 舟田三郎氏亡くなる……………(10)
会務報告・ルーム日誌・会員移動(10)(11)
関西支部図書に関する小史……………(11)
カット/芳野満彦・宮下啓三・松本慎太郎

▶ 日本山岳会事務取扱時間

月、火、木、土曜 10時～20時
水、金曜 13時～20時

日曜・祭日は休み

▶ 図書室開室時間

日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時



珠穆朗瑪峰計画について

渡辺兵力

(一) はじめに
すでに元旦の各紙でご承知の会
員も多いかと思いますが、諸般の

事情で昨年末に一九八〇年本隊の
計画を公表することになり、この
会報でのお知らせは、本隊の先発
隊が発する後になってしまいう
結果になりました。

いろいろとご心配をおかけし
たかと思いますが、十一月末に
はJAC隊々員の大半の選考を
終り、日本から送る必要物資
(約十一トン)も十二月十八日
の船便で送りだすことができました。
七月月上旬に許可の知らせ
を受け、秋に偵察隊を出し、そ
して本隊の準備の大半を年内に
終るといいたいへん忙しいこと
でしたが、多くの遠征につきま
とう募金業務がないために、短
期間で本隊出発を待つまでに漕
ぎつけることができました。

登山許可は日本山岳会隊にお

りましたが、今回のような登山計
画はJACの力だけでは実現に踏
みだせません。中国側はその辺の
事情を先刻承知しているのか、許
可状の宛名が日本山岳協会、日中
文化交流協会、日本山岳会の三者
になっており、また、中国大使館
筋では読売新聞社の力添えのある
ことを、許可状の通知の段階で期
待しておられました。その後、日
本テレビ放送網株式会社も読売新
聞社と同格で協力されるようにな
り、最終的には五者共催の登山計
画というかたちで公表される(昨
年十二月二十八日の読売社告)こ
とになりました。とはいえ、JQ
E計画はあくまでも日本山岳会の
チョモランマ登山計画であって、
登山計画とその実践の責任は当会
にあり、この点、今日でも本計画
の出発のときと計画の本質には変
化はありません。

(二) 行動計画
ロンブク河の基地(大本営)五

木曾御岳の噴火

式正英

昨年十月(一九七九年)は荒
々しい自然現象がおきては、
慌しく過ぎた。先ず上旬の七
日頃、台風十八号が西日本を通
過し多量の雨をもたらした。そ
れから二週間とたたぬ内に台風
十九号が本州の東寄りを足早に
通り過ぎた。特に十九日の雨風
の物凄さは、東京では暫く忘れ
ていた台風の脅威を思い起こす
のに充分な程であった。それか
ら九日目の二十八日、この日は
十月の最後の日曜日であったが、
「朝の六時五〇分、木曾御
岳が突然の豪音と共に噴火し
た」というニュースが伝わっ

て、皆が耳を疑った。
灰色の噴煙は一〇〇〇m上空
まで噴きあがり、火山灰は東に
飛び散って軽井沢から前橋にま
でおよんだ。初めの内は噴火の
規模と継続性についての予測が
つかないままに、大地変につな
がるのではないかと底なしの不
安も広がった。しかし二日目
には灰色の噴煙は白煙に代り、三
日目には噴煙も沈静の方向に向
かい、二週間後には再噴火の気
配は殆んど窺えない状態となっ
た。噴火の規模がさほど烈しい
ものではなく、悲劇的な被害が
生ずる結果にならなかったのは

山をきれいに「三」は持ち帰ろう

一五〇m)に到着して十分に高度馴化をするためと、その間に東ロンプク氷河と中央ロンプク氷河のABCにヤクによる荷上げを完了しようという考えから、先発隊(三十二名)は二月二十二日に東京を出発し、北京、成都、拉萨を経て三月六日に大本営に到着する予定です。この間、一月十日ごろ陸送の荷物は北京を出て、甘肅省の西寧まで鉄路、それからトラップでチベットに集結している予定になっています。二月末までには全ての荷物が拉萨に集結している予定になっています。本・後発隊(八名)は三月五日に東京をたち、両氷河のABCが建設されるころには大本営に到着する計画です。

JQE計画は、東京―大本営間、一つの登山隊として行動しますが、大本営から先は北東稜隊と北壁隊とに分れて行動することになっています。

北東稜隊は浜野副隊長が責任者となっており、JAC隊員十一名、報道隊員十名、計二十三名で編成しました。そして、テレビ報道をやりながらノーマル・ルートから登頂しようという計画です。したがって、ノース・コルへの安全な登路を開拓し、ノース・コル付近に前進基地を設け、八五〇〇m以上に第七キャンプをつくれるか、がポイントになります。中国側の荷上げ協力第五キャンプ(七六〇〇m)までと予想されますので、

それ以上の荷上げをJAC隊員だけでやらねばなりません。医療、通訳といったABCを離れられない任務のある隊員をのぞくと九名の力で、有名な西北風の激しい北東稜ルートをやるのですから、けっして容易な山登りではありません。しかし、世界ではじめてのテレビ画像がこの登攀の実況をとらえる予定です。

北壁隊はご承知のようにバリエーション・ルートをやることになり、エヴェレスト南西壁の第二回偵察隊長をつとめた宮下副隊長を責任者として、JAC隊十一名、報道隊員二名、計十四名が当ります。北壁の場合、中国側の協力は約七〇〇〇mの第三キャンプまでがやっとという見込みなので、壁の登攀活動の大半はJAC隊員だけでやることになり、文字通り日本人だけの山登りということになります。取付地点(六二〇〇m)から七三〇〇m付近までの氷壁の登路開拓とその荷上げが成否の一つのポイントと思われま

す。また、第五キャンプ(八四〇〇m)の位置と登路選択が第二のポイントとなりましょ。二六〇〇mの標高差をもつ北壁は巨大な壁ですが、最上部についてはアメリカ隊(一九六三年)の情報もあり、十分に成功の可能性があると考えています。

両隊共、ABC以上の行動開始は三月の下旬ごろで、全てが計画通りに運べば四月末日ごろに登頂という予定です。大本営以上の地域での行動期間を五月二十日までとしていますので、登攀活動には約二十日間の余裕をみています。今春のチモランマ地域の気象状況がどうなるのか、全く予知することはできませんが、十日間以上の悪天候に出会わないならば両隊の登頂は可能と信じています。今回は、報道の速報体制をとっていますので、登頂前後の実況はニュースのかたちで会員にお知らせできるものと思っております。

(三) 隊員編成

JACが最初に提出した計画書では、隊長西堀ほか隊員三十名ということでした。八月に中国側との議定書調印段階ではこの規模で計画をすすめることにしていましたが、その後報道側の要望もあり、また登攀計画を検討している過程で、増員を要請する必要が生じ、中国側との打診的交渉をすすめ、十月の備忘録調印段階で四十名(うち一名北京駐在)という枠が正式にきまりました。

第二回チモランマ委員会(九月二十六日)で、総隊長、隊長、副隊長(二名)という組織とその候補者と承認されましたので、十月一杯をかけて、JQE計画に参加を希望されている方々(約五十数名)に、隊長、副隊長(候補)が面接し、また各自に身上調書を書いて提出していただき、さ

木曾御岳の噴火

幸いであったが、御岳噴火のもたらしたショックとその意義にはさぶる大きいものがある。御岳山には噴火の記録が全くなく、噴火予知の監視体制からははずされていたノーマークの火山であった。火山地形の特徴を持ちながら噴火記録のないものは死火山と定義されるものだが、四年程前に気象庁と火山噴火予知連絡会の人々が、御岳を活火山へとリストアップした。この度の噴火の主火口になった地獄谷頂部の赤地獄が、唯一の噴気孔として常時硫黄臭のある水蒸気を噴き続けていたのが活火山に昇格できた主な理由である。活火山と認定しておいたのは、せめてものお手柄だけれども、噴火については「よもやあるまい」と思っていたのが、火山噴火予知関係者の本音であろう。



木曾御岳の噴火、1979年10月28日午前9時
(三岳村役場提供)

された有機物について、放射性炭素による年代測定が行なわれ、最も新しく一万年またはそれ以前という結果が出されている。この数字から「一万年の眠りから突然目覚め怒る御岳山」といった驚きが伝わったのである。

噴火には強烈で破壊的な爆発から、比較的静かな熔岩流出など、様々なタイプと規模がある。この度の噴火は水蒸気爆発が主体であり、地下のマグマが新たに上昇してきた証拠になる、マグマに由来する物質は噴出物から検出されていない。火山灰や火山礫はすべて既存の山体がこわされて出来た物質と今の所は判定されている。その堆積量も火口周辺の山頂付近では

らに読売診療所の協力をえて身体検査をうけてもらいました。この三つの資料を検討した結果から、内定者を選び、さらに総隊長と協議をしたらうで、当方より参加協力をお願いしたい人々と西堀会長が直接に面談して計画の相互理解を確認しました。それが終わったが、十一月下旬でしたが、すでにJQE事務局は荷物の発注・集荷に忙殺されるときでしたので、個人に隊員内定を通告して準備作業に参加してもらいました。中国側との約束で、北京到着日の二ヶ月前に隊員名簿(補欠者を含む)を正式に提出しなければならぬので、十二月二十日ごろ、JAC隊員三十名(補欠四名)を決定し、報道側の決定をまて二十八日に四十七名の名簿を送りました。

訪中するチョモランマ登山隊員は以下の通りです。

渡辺兵力(会員番号三〇二九 隊長 六五才、宮下秀樹(五五五〇 副隊長 四八)、浜野吉生(五八一五 副隊長 四二)、斎藤淳生(五三七三 医師 五〇)、北壁隊・神崎忠男(六〇〇二 チーム・リーダー 三九)、高塚武由(八四四〇) 食糧 三七)、高見和成(八〇六一 記録 三四)、重広恒夫(七九三一 酸素 三二)、宇部明(八六八〇 気象 三二)、小林利明(八六八五 燃料 三〇)、伊丹紹泰(七四九〇

輸送 二九)、尾崎隆(七八〇八 設営 二七)、和田昌平(八六七七 装備 二六)、佐々木慶正(八六七七 食糧 二四)、賀集信(八六七八 医療 三〇)、北東稜隊・中村省爾(八六八四 食糧 三七)、小原俊(六六六六 記録 三〇)、長谷川良典(六六九九 酸素 三二)、横山宏太郎(八六二六 気象・通信 三二)、加藤保男(七八一六 チーム・リーダー 三二)、甲斐邦男(八六四二 装備 三二)、降旗義道(八六三八 輸送 三一)、山下松司(八〇〇九 燃料 三〇)、神谷雅行(八七〇一 通訳 二九)、三谷統一郎(八六七六 設営 二三)、西山正二(八六八六 医療 三二)、以上二十六名。この外に読売新聞五名、日本テレビ八名計十三名が報道隊員で、北壁隊には記者一名、カメラマン一名が参加、他は北東稜隊の方に参加します。大本営に籍をおくのは渡辺隊長、斎藤医師、島田記者の三名で、他は全員が北東稜、北壁の各ABCに在籍することになります。中国側の協力者は、連絡官二名、通訳三名、管理員二名、高所協力員二十二名、BC勤務員六名、ヤク工十三名、無線要員四名、運転手三名、会計係一名、計五十六名です。

第十七回『この一本展』より(1)

第十七回『この一本展』は、旧冬、恒例の年次晩餐会の会場に併設して開催した。今回も十名の方々から十二点の貴重な図書の出品



—会場風景—

のご協力をいただいた。いずれも稀本、愛蔵本であり来会者に好評であった。出品者各位に厚くお礼申し上げます。

最も厚い所で七〇cm、東麓の村々で数mm、軽井沢の峯の茶屋付近で痕跡程度である。

水蒸気爆発となると、十月に入ってから豪雨が引き金になったとも考えられよう。最近の阿蘇山の爆発も豪雨の後であった。この場合は豪雨の影響で土砂が火口を塞ぎ、透過した雨水が地下の熱源にふれ蒸気圧が極端にあがって爆発へつながった。箱根山の温泉の湧出量と降水の間にも密接な関係が知られている。これらのメカニズムは御岳噴火の場合も吟味に値する。

熔岩流出や多量の噴出物を伴わなかった今回程度の噴火が、過去一万年間なかったかどうかについては既に疑問が投げかけられている。日本の火山で古文書に記録のある噴火で、六世紀をさかのぼるものはない。記録そのものが地方によって著しい差異もある。それにしても今から約千五百年以前の噴火記録については全く空白なのである。

先史時代の遺跡を蔵う火山噴出物の例はあるのだが、今回山麓に降った火山灰の量程度では痕跡となつては残るまい。地獄谷頂部の火口趾は新鮮な点ながらも指摘されていた位だから、今回の程度の噴火は、記録のない期間に数回あったとする方が自然である。

磐梯山の一八八八年の噴火の場合は、千年の沈黙の後に、前日の軽い地震を前兆としただけの猛烈な水蒸気爆発であった。御岳噴火の場合も殆ど前兆らしいものはなかったが、山頂から南に一〇キロの山麓の王滝村付近の、地下数km付近に震源をもつ群発地震が、昨年とその二年前に観測され、噴火後の十一月にもおきている。噴火現象と周辺の地震とを直結して関連づけることは、どの場合にも通用することではないが、地下の何らかの異変を、この局地的地震が伝えていることには変りはない。

豪雨の刺激だけが噴火につながる筈はなく、地下の熱エネルギーの分布に変化があった筈である。新しいマグマの上昇の証拠もないとなると、古いマグマが徐々に放熱していることに原因があることになる。御岳火山は高さ一五〇〇—二〇〇〇mの山地の上に、重なるた火山体であり、その地点は基盤の古生層岩石と石英斑岩の接する地質境界にあつてはいる。今回の噴火は南微東にならぶ十箇ばかりの小火口の列が示すように割れ目の噴火であった。噴火前後の二枚のランドサット衛星映像を比較すると、噴火後は南北割れ目から派生し、これに直交して東に延びる割れ目が二条新たに観ら

なお図書委員会では、当日出席できなかった方のために、また会場ではゆっくりご覧になれなかった方もあろうかと考え、各出品者の解説原稿を本会報に逐次掲載し、参考に供することとした。

(図書委員会)

扶茲日記(不二日記)和書

桑門 在融著

天保十四年板

古来、富士の登山記は伝説、口伝をまじえて数かぎりない程、たくさんある。

富士の文書、絵画の蒐集家としての第一人者と目されていた曾我部一紅氏が、大正十二年の関東大震災に、蔵書もろとも本人も焼死されてしまったので、今はただその目録のみ残ってしまったのがいたましい。

小島烏水の「不二山」巻末にも、不二の書籍絵画目録が載っているが、これは完全なものではない。古来からの登山記を簡潔によくまとめたのは、山崎安治著「日本登山史」中の「富士の登山」の一文であるのの一つの発見であった。

深田久弥の編著になる「富士山」(青木書店・昭和十五年刊)には一番信用のおける、また興味深い登山記として、寛政二年板の加藤季鷹の「富士日記」を採用し載せておられるが「扶茲日記」は年代こそあとになるが、これに劣ら

ない登山記だと言われている(小林義正著「山と書物」)。

内容の紀行文はともに江戸発第一日は八王子泊り、第二日は大月あるいはその近く、第三日に登山口の吉田泊りとなる。仕度を整えて、八合泊り、あるいは一合に頂上を往復している。

この扶茲日記では七月二十一日に江戸発、帰りは足柄峠を越え、八月二日に江戸に帰着している。「富士日記」では帰路各所へ寄り道しているで、これよりずっと日数を要している。大体の江戸末期の富士登山に要した日数がわかって面白い。

以下は蛇足だが、出品した本は何年前に、何処の古書店で入手したかわつたが、興味をひいたのは開巻第一頁の右下に「小雨莊蔵」という蔵書印のあることが判った時である。

お気付きの方もあると思うが、それはこの天下の書痴をもって自ら認じ、幾多の凝った装幀で特殊の内容の本を多数出版された、斎藤昌三翁の蔵書印であることを発見したときの驚きだ。

斎藤昌三は自らは山へは登られなかったが、登山には興味を持ち、小島烏水とは若い時から親交があり、自ら主宰した書物展望社から、烏水の「書斎の岳人」を発刊されたとき装幀には凝りに凝りて、表紙の表を丹念にあつめて背表紙がわりにするなど、今では到底できないことをやった。烏水もこれに感謝して巻頭に深く謝意の文を載せているが、それはこの書物をご覧になればわかる。

また翁は昭和三十六年、岡野金次郎の追悼記念碑を湘南平の丘上に建てるにあたって、終始その実現に奔走され(昭和四十八年刊の「近代登山の先駆者たち」参照)除幕式には寒風吹きすさぶ丘上で、主宰をつとめられた。その時翁に初めて拝肩できた私としては、色々のことをお聞きしておけばよかったと思ったが、その後間もなく他界されてしまった。その龍大な蔵書も「蔵書は一代」という翁の遺志により、没後間もなく明治古典会の手を経て散佚されてしまった。まことに惜しいことであつた。私のこの本も、散佚されたおかげで入手できたかわれたのであつた。

石川治郎

黒部奥山と奥山廻り役

中島 正文著

この本は、中島正文氏が「山岳」三十二年一、三十三、三十四、三十五年一各号に三回にわたって発表した、越中の農民による黒部奥山の探検・調査に関する研究論文を別刷合冊したものである。

合本にあたって、新たに巻頭に小島烏水が序文を寄せ、著者自身も小序を書き加えている。

れた。このような割れ目の方向性は、基盤の飛騨山地が隆起しようとする造山運動に伴って生ずる断層線の卓越方向に平行している。飛騨山地に載る御岳乗鞍火山帯の諸火山の活動は、今回の噴火活動を含めて飛騨山地が生きている証拠に他ならぬ。

アルピニズムよりは信仰登山の対象として古くから親しまれた。このように割れ目の方向性は、基盤の飛騨山地が隆起しようとする造山運動に伴って生ずる断層線の卓越方向に平行している。飛騨山地に載る御岳乗鞍火山帯の諸火山の活動は、今回の噴火活動を含めて飛騨山地が生きている証拠に他ならぬ。

ご覧の通り私が架蔵しているものには奥付がない。直接中島氏に手紙で問合せたところ、昭和十四年十一月三日発行、発行所、中島図書館、一〇〇部限定、非売とのことである。

詳しく調べたわけではないが、この「別刷合冊」は当時の「山岳」「会報」の図書紹介欄には取り上げられなかったようである。小林義正著「続・山と書物」に「小島烏水全集」と題する文章があり、そこに烏水の他書に寄せた序文跋文のリストが出ているのだが、この「合冊」にある序文は載っていない。中島氏からのお手紙にも、百冊は主に図書館、大蔵書家に寄贈したとある。しかしルームの図書は戦火で灰燼に帰してしまっている。これらを見ると、この「合冊」の存在は案外人々には知られていなかったのかも知れない。

なお中島正文氏は「会報」二三

藤江幾太郎
山の画展

山の画集原画〈日本の山〉より



◎時・ 3月 10日～14日、9:30～17:00 (最終日2時)
所・ 三菱 231、丸の内2三菱商事別1F館 (丸ビル裏)
約 30点 電話 03 (210) 2527
◎時・ 3月 31日～4月 6日、11:00～6:30 (最終日5時)
所・ ギャラリー・モテキ、銀座8松川ビル2F (大通り)
約 15点 電話 03 (672) 5193

て来た御岳について深田久弥は「日本百名山」の中で、不思議にも次の様な暗示的な言葉を書いている。「この山は…大部分がアンカートの龍大な書物のようなものである。…どのページを切っても、他のどの本にも書いてないことが見付かるだろう。そんな山である。」

(科学委員会)

八号掲載の「回想の岳人(2)」で烏水を追憶すると共に、この論文ができる迄の苦心談や、烏水にお願いした「序文」についても書いています。拙蔵のこの本は冠松次郎に献呈

されたものである。黒部奥山の研究者から黒部の探究者に贈られた本ということで、一層の光彩を放っていると思う。

岩瀬皓祐

ヒマラヤ山探険

長田秋濤訳

(明治三十三年)

「本邦最古のヒマラヤの本」
「本の名前も著者の名もない幻の原著」

一週間ほど前、会のルームで山崎安治氏につかまった。この一本展に何か出してもらいたい、というのである。

さて何がよいかと思案したあげ句、会の図書室にもないといわれる本書「ヒマラヤ山探険・長田秋濤訳―明治三十三年 春陽堂刊行」を出してみることにした。

二一〇頁ばかりの、背文字もない小冊子は、長い間私の家の書棚の厚い本の間に挟まれていて、戦後ほとんど手にふれることもなかったものである。私は前に、日本でヒマラヤの本の訳書が出たのは、昭和五年の田辺主計さんの「エベレスト」が第一号であろうと書いたことがある。ところが、ここに展示する「ヒマラヤ山探険」はなんと明治三十三年の出版であるから、とんでもなく古いのである。

訳者の長田秋濤氏は、小林義正氏の「続・山と書物」によると、ケンブリッジ大学、ソルボンヌ大学に学んだあと、早大の教授をし

たほか、多方面で幅広い活躍をした、とある。

何よりも面白いことは、本書は長田秋濤訳とはあるが、原著名はおろか原著者名も明らかにされていない。夫妻でカシミールを旅し、ナンガ・パルバットを望見するところまで行って引き返し、ラダックのレーに行こうとするが、路銀が乏しくなったためスリナガールへ戻った、と述べてある。六月七日にシムラを出発し、十月三十日ラホールへ帰着するまで、夫婦で四ヶ月ちかい旅を続けたこの間の見聞記は、夫人の手によって書かれたものである。

小林義正氏もこの本の原著者に興味をもたれ、年代的には符号しないけれども、夫妻で初期のヒマラヤの旅をやったとすれば、ワーグマン夫人か、あるいは「Lady Pioneer」の匿名でインディアン・アルプスの紀行を残した婦人ではあるまいかと「続・山と書物」のなかで推定しているが、私見ではあるがどちらも当たっていないのではないかと思う。

本書を注意して読んでみると、まずこの著者が英国人でも米国人でもないことに気がつく。二、三の個所でフランスに例をとっているところからすれば、どうもフランス人ではないかと思われるふしがある。フランス人らしい決め手ともなるべきものは、この旅も終末に近く、プラターという地点

図書

紹介



ハントの二冊の本

ジョン・ハントの自伝「Life is Meeting」が刊行されて、そろそろ一年近くになる。この近來の快著について誰も感想を記さないのは甚だ残念なので、おそまきの紹介を試みる。

ハントと親しい人たちは別として、私たちの間でハントその人について詳しく知るものは、従来から少なかった。一九五三年のエヴェレスト遠征に、突如そのリーダーとして登場したとき、ジョン・ハントとは軍人なのに、どんな山登りをやってきたのかと、不審に思われたものだ。当時はヒラリーでさえ驚いたほどだから、一般が知らなかったのも無理はない。では今日、すでにロード・ハントと爵位を授けられ、上院議員にも列している人物について、その輝かしい半生について、どれほど知識を加えたかといえ、やはり「エヴェレストのハント」以上には出ていない。

Life is Meeting は、そのハントの六十余年にわたる詳しい自伝なので、初めてこの人物の歩みをつづけた道程について知ることができる。十才のころ戦争未亡人の母に伴われてスイスに滞在した折から、すでに山に親しみ、十三才の折、マロリーとアーヴィンのエヴェレスト遭難の報に接して、自分も山に登ることを決意したという。そのような幼少のころから筆を起して、第二次大戦勃発までのインド駐屯中にカシミール、カラコルムそしてカンチェンジュンガ山域へと、精力的な登攀を行なったことが詳しく語られている。

これらの山歴を知ると、一九五二年にアルパイン・クラブが、シプトンに代ってハントをリーダーに選んだ理由が、ようやく私たちにも分かるような気がする。シプトンが辞退したあとを引受けるまでのいきさつについても、ハントはシプトンの気持を察しながら、筆をとっている。

エヴェレスト成功のあと、ハントは積極的に登山遠征をつづけ、ソ連に招かれてコーカサスやパミールにおもむき、またグリーンランドやギリシャのビンダス山脈までも出かけた。それと平行して、ハントは青少年の海外遠征活動に非常な熱意を燃やし、エディンバラ公を載くそれら青少年への奨励金制度の主宰者となって、戦後の若人たちに活力を与えてきた。そ

会費未納の方
方は納入下
さるようお
願いたし
ます

事務局

のほか、次々と社会事業的な仕事の責任を託される過程なども詳述されて、登山家以外に公人としての貢献の大きさを知らされる。

その書名が示すように、「人生とはすべて出会い」であるという信条の下に筆を執ったというだけに、ハントの半生を通じてのいろいろな人々との出会いが描かれている。それらの中には、すぐれた登山家たちも数多く登場する点、私たちにあって、この自伝の大きな魅力といえる。

*

ハントのもう一つの本は、自分が好む登山記十一篇を選んだ編著である。そのようなシリーズの一冊なので各篇とも全文ではなく、抜粋で、すぐれた古今の登山記のにおいを嗅ぐ程度のものだが、編著者がハントだけ

で、かつてこの地に滞留した「我が同国人ジャック・モン氏云々」という一節がみえることだ。

そこで私は、ジャック・モン氏なる人物が、何国人であるかを調べてみればわかるに違いないと思つたが、この一本展まで余り日もないため横着をして、島田巽さんに心当りはないだろうかと電話で教えを乞うた。ありがたいことに一時間ばかりして島田さんから電話があった。

ジャック・モンはVictor Vincestas Jaquemont でバリ出身の植物学者、旅行家でもあり、一八二八年—一八三二年 印度に在住し、ボンベイで亡くなった人だということである。

これで予想どおり本書の原著者がジャック・モンと同国のフランス人であることは明らかになったのだが、しかし依然としてその名前がわからない。夫君が人類学、人種学の学究であるらしいことは文中から推察できるが、夫君の名前も本書全文を通じてどこにも記されていない。正に幻の著書であり、幻の著者である。

なお、小林義正氏が、もしかしたらと言っている a lady pioneer なる匿名で書かれた本、インディアン・アルプスの紀行は、シッキ

山スキーについて(私の体験から)(上)

板をつけてから既に七十年が過

登坂信雄

きた。独学独習なので技術面に多

ムとの国境にあるシンガラ山系の探検をしたものを一八七五年にロンドンで出版したもので、踏査地域が全然違っているのみならず、匿名ではあるが英国人であることが文中明瞭にされているので、少なくとも本書の該当者でないことだけは間違いない。

「ヒマラヤ山探検」を私は昭和十二年ごろ、日比谷電報前明治堂書店で円五十銭で手に入れている。明治三十三年の発行定価は三十銭となっている。

さて、ここまで書いた私は、再び思うところあって望月達夫氏に電話をかけた。いうまでもなくこの訳書の出典についてである。望月氏は即座に、たしか深田さんの本のなかにあった筈だ、どの部分にのっていたか、今はわからないが調べてあげよう、ということである。

委細判明した。深田さんが大変苦心してその原著者の婦人を探し出たといきさつが「ヒマラヤの高峰」下巻のチョモ・レンゾの章に詳述されている。著者はウィーファルヴィ夫人、本の名は Voyage d'une parisienne dans l'Himalaya occidental 一八八七年刊行であった。

織内信彦
(以下次号)

に、どのような人たちに関心を抱いているかが、一目でわかって興味がある。ウィンバーのマッターホルン登頂記がもっとも古く、フィンチ、ヤング、スマイス、グレアム・ブラウンなどが出てきて、さらにノイス、ヘルマン・ブル、ブラッシャー、ヒラリー、ドゥガル・ヘストンとダグ・スコットとつづく。

いずれも、それら登山家の著



作から選んでいるので、大体すでに知られているものが大部分だが、その一つことに、なぜそれを選んだかをハントが記している短文がついている。本当に短いのだが、これが、この一冊の値打ちといえよう。

・ Life is Meeting by John Hunt
London: Hodder and Stoughton, 1978
・ My Favorite Mountaineering Stories
edited by John Hunt. London:

Lutterworth Press, 1978 (島田 巽)

Mountaineering and its Literature

by W. R. Neale

W・R・NEALEの一九七四年から一九七六年にわたる世界の英語山岳図書を網羅した十年がかりの労作。主な内容は、①「SUBJECT INDEX」②世界山岳史、山域に関するコメント(辞書)③「MOUNTAIN INDEX」④略図付きの山名、⑤「AUTHOR INDEX」⑥著者別に山岳図書を集成(全図書に番号付記)。

例えば①のインデックスで「EVEY REST」を引くと、試登、登頂隊が年代別に列記、そのトップは一九〇一年のノエル・ル・ベットのアップローチがある。これに番号が付記されている。その番号を②のインデックスで照応すると、NOEL, John Baptist Luciusの著書のひとつとして出る。③のインデックスで「EVEY REST」を引くと、①のインデックスを参照とあるが、他の山には番号があり、③のインデックスでその山に関する図書を拾う。英国人ならではと頭が下がる。「愛書家はもちろん、登山家、探検家の必携書」CICERONE PRESS p. 165 (片山全平)

上高地 道遥雑誌

楠目高明著

多勢に読まれそうな書物で、事

実と異った内容が面白く書かれた場合、困った問題の生じることがよくある。この本の巷間の評判が良だと聞いたので、私はむしろ逆にその裏をほじくるつもりで読んでみた。

ガイドブックでも研究書でもないところとがきでいい、性格のあいまいな閑談のりとはさみでつぎはぎしつくりあげたと著者は謙遜して言っているが、そういうところはみられない。それぞれの内容をかなり掘りさげて書いているので、著者のいつているようなつぎはぎのあとを意識することはできない。それよりもむしろ、掘りさげがかなり専門的なのが気になった。これは第一章上高地の自然で特に感じられた。

上高地周辺の地形、地層から太古の様子を推測するといった著者のとる方法はよいが、専門家でもドラムリンが単なる丘陵が見分けにくいのであるから、ここはむしろ方向づけをして、読者に豊かな山登りをする方法とし、地学という学問へ興味をひき寄せるといった程度にとどめるのが適当と思う。穂高岳を見ながら穂高という名称の変遷を思うといった著者の態度は正当であり、ただ高いところへ登りたがるバカなどと言わずにすむ、豊かな山登り法を指示するようににも思える。

少の疑問は残るが、山スキー五十有余年を無事に生き長らえ得たことだけが収穫だったと満足している。

近頃は山スキーへの転向者も多少は出てきたようだが、五色沼尻コースを踏破しないと一人前に扱われなかった旺盛な時代に比すれば大変な変わり方である。

結論を先に述べるとグレンデスキーと山スキーとは全く異質のもので私は判断しており、グレンデの最終到達点は山スキーだとの結論は怪しくなってくる。

・平踏みに徹する

基本的にスキーは歩く、登る、滑るの三要素で成り立つわけだが、すでにグレンデでは滑ることのみが主体となり、歩く登るの二点は正にリフト任せ。さらになおざりとなる傾向が益々強くなった。最も大切な基礎となる平踏みでさえ常に雪面を平に踏むよう心掛けている向きが何人あるかである。

近頃私は駅の階段や歩道での人の歩き方が気になり出し、つい足元に目をやる癖がついたくらい。正當に歩ける向きは一人に一人有るか無しとなる。

毎日の歩行も必ず平に踏んで歩くように訓練を重ねてゆくべきで、足癖を是正しない限り長距離のスキーツアーはこなし得ないのではないかと心配になる。

足癖がそのまま雪上のコースに記されると同行者に大変な迷惑をかけることとなるし、歩行中は疲労が倍加し滑降に入ると転倒が多くなる。私も疲れてくると足癖が出ては正に苦労するが、雪上を歩きながら後を振り返ってシュプールの調平踏みに戻すよりでてはない。

自分の足癖を承知し正しく歩く努力を日が続けているが、両スキーが突き当たる程狭い踏跡を作ることが理想となる。私の体験では山でシュプールの拝見しただけでどの程度の技術を持つ隊か判断出来るようになった。



十名以上で隊を組み雪原や斜面を進むと、踏跡は荒れはてて中には段まで生じその上幅まで広くなる。殊に方向転換の箇所は踏跡が消えてしまいうラストの者は実に歩みにくい。

板は短尺物で山靴をじかに使う用具が近頃の傾向だが、短かければスキーの操作が楽だと判断されるからと思う。しかし私はこれとは全く反対に二・一メートルの長尺物を使っている。利点は滑らせながら歩けるし、ラッセルでも板

河童橋で撮ったウェストンの写真にいくつかの疑問を投じた西岡氏のように、著者は随所に疑問を持ちメスを入れる。ただこの著者が西穂高村の牧を穂高村の牧としたり、山村民話に使用している方言を私たち地元の方が使ったことのないような話し言葉で綴るのには違和感を持つ。穂高神社の海人、安曇族を語るとき高松塚古墳や稲荷山古墳の話が出て、なぜ牧近辺で発掘された遺跡のこと、仏崎とか、押野崎とか、沢巾などといった地名もある安曇平一帯の地形や地層に思いをめぐらせてくれなかったのかと思う。

雑炊橋の伝説で著者はエンゲル係数の低下は食事をより一層貧しくしていくというように書いてはいるが、エンゲル係数は生活費のうち食費にあてる割合をいい、エンゲル係数が低くなる時文化水準が高くなると定義されている。したがってここは著者の思い違いだと思う。また最後にナイロンザイル事件を日本山岳会員である著者がここでとりあげた意図が私にはよく理解できない。問題提起すべきものがまだあるというのだろうか。

これでこの本の紹介を終るわけだが、読む姿勢が姿勢だった書だけに聞く人には聞きづらいと思う。しかしこの本に難くせなければこれくらいいしかないというように受けとっていただきたい。一九七九年六月三十日 草思社 刊 定価一三〇〇円 (岡沢祐吉)

「北アルプス」

日本山岳写真真集団

日本山岳写真真集団の同人十三人によるカラーの共同写真真集である。

日本山岳写真真集団は昭和四十二年に創立されたプロ写真家の集団で、写真界に山岳写真の位置づけをした集団であり、「心の山」をテーマに毎年山岳写真の力作を意欲的に発表していることでも知られている。本書はこの集団がさきに開催した第十回日本山岳集団展「北アルプス」をさらに集大成し、一冊の写真真集にまとめたものである。

特定の山城を一冊の写真真集にまとめて表現しようとする場合、その撮影、編集意図をどこにおくかということがきわめて重要であることはいうまでもない。ことに北アルプスのごとく、過去にあらゆる角度から数多くの作品が発表されていく山城を対象とする場合、この意図が明確でないとその作品は新鮮味に乏しく、迫力に欠けたものになるであろう。編者はこの点を明確にしており、編集代表の

三宅修氏はそのあとがきで、従来の山岳写真家は北アルプスという被写体をとかくヨーロッパ・アルプス的に表現する傾向があったことを指摘し、本書ではこれから脱皮して「日本の山としての北アルプス」を表現するように努めたと述べている。

本書はこの意図に沿って、十三人の同人の作品九十二点を頂稜、春岳、夏峰、秋嶺、冬山の五編に構成し、北アルプスの四季の移ろいを叙情的に表現し成功している。ページをめくっていくと、その一点一点に山に対する各作家の個性的な感受性が見え出しており、味わい深い写真真集となっている。

また巻末には各作品のモノクロ小型判を付し、それぞれの作家が解説を付け、撮影の苦心談やその時の状況がリアルに語られ、厳しい自然に取り組む姿が伝えられている。なお装丁に一工夫すれば、さらに内容を引き締める効果があったかも知れない。

A4判正寸・オフセット多色刷一四四ページ・二色刷八ページ単色刷四十ページ・昭和五十四年七月一日・実業之日 本社発行定価八〇〇〇円 (松家晋)

が埋まらず滑降では体のブレが激減し転倒が少なくて済むからだ。

ツアーから得た教訓で私は軽装では絶対に雪山に入らなくなつた。当然重装備となりリュックは四十キロを越え、さらに八十キロの体重が加わると板の負荷は百二十キロ以上となる。

するとテールがピンと跳ね上がり雪面にふれる板の部分は全長の三分の一程度となつてしまひちよつとしたつまずきでも転倒する。

転倒はスキー場なら当然の事として取扱われるが、ツアーでは最悪の場合死に結びつく。重荷だと一回の転倒でも疲労は倍加されるし不用意に転べば恐ろしい滑落が待つ次第だ。

だからツアー中の転倒は絶対にタブーで、私は「だいい吹雪くよう」でそれとなく注意を促している。入門当初は転倒に全く無関心だったが、死の恐怖に直面するにつれてその対策を講ずるようになった。こうした鉄則はゲレンデでは夢にも考えられない点だと思ふ。

スキー靴も爪先が上がり、足癖のついた山靴では平踏みは不可能に近いし、まともな歩行さえ困難なバックル式では、長距離のツアーにはどう考えても無理となる。

シールも雪面を平に踏まないに登る時に滑り、降りる時に滑らない不思議な用具となる。私達の仲間ではシールをつけたまま回転が



三水会だより

・大正末期の剣岳周辺

講師 小笠原勇八

私は大正末期にいつのまにか剣に入っていた。その頃は室堂のほかは弘法と追分に小舎があるだけだった。山に入る動機は郷里の岩木山麓に育った影響が大きいと思う。

熱練者のごとく振舞っていたが、剣岳周辺ではずいぶん危険に遭遇し、一歩手前で失敗を免れたこともある。第二回目に入ったときは一ヶ月も室堂に沈没した。

当時は登山具らしいものがなく、ザイル一本を頼りに登はんした。本格的に剣に入ったのは卒業前後からであった。そのあと日本アルプスに関する本を発行するので、その確認のため谷に入った。早月、小窓、三窓、八ッ峰の尾根筋だけでなくいくつもある峰、岩場のある谷に入った。次いで内蔵助平には二、三回入ったが、人っ子ひとりい

ず誰にも会わなかった。ガイドの話によると年にせいぜい一人か二人位とのことであった。当時の谷を一つ一つ克明に探った。立山が好きになったのは何となく漂ってくる雰囲気や、山の住人にいだいた親近感からだと思う。この地域では芦峠寺の有名なガイド達に会った。長次郎や平蔵はその頃はもうあまり入っていなかった。

古いガイドの福松(剣沢で遭難、光次郎といった人々に会うとまるでわが家に帰ったような雰囲気になり、随分とたのしい思い出が残っている。案内人とともに酒を酌み交しあひながら山を語るといふことはとてもたのしい一時だ。以上のように立山、剣の周辺には一種独特の雰囲気があり、これに誘われこの地に入山したのと思う。数年前、剣御前(鶴ヶ御前ともいっていた)に入ったが、ほとんど変化がなくてなによりだった(もともと上部のカニの横道は別だ)。冬期に何回か光次郎と一緒に入った時のことは今でも懐しく思い出される。兎を捕え酒の肴にして盃を交わすのは何よりも楽しい一時だった。

どうして山に入る心境になったのかは前に申上げた。盛岡の中学を出て上京し、早大へ入るとき車中で三田の「登高行」第一年を見ることができたが、これが本で山を知る第一冊目であり、私の山登

りの教科書であった。またその頃藤山愛一郎氏もこの本で知ることができた。当時三田に大島、八木橋岡氏を舟田、麻生両氏と共に訪問し、何かと教えを乞うたものだった。大島さんが私たちに言われた「山登りが何より好きです」という言葉は印象的だった。氏が書かれた文章や豊富な詩によって、黙々として山に登る氏の姿を想い出せるのは誠に楽しい。

八木橋氏が早稲田の集りに来ら



れたことがありました。遺稿「かたつむり」の詩を通じ、ロマンを求めた氏の人柄を感じることが出来ます。

昭和の初めに玉川学園が招へいたシユナイダー氏と一緒に歩いたことがあります。そのツアーでは自分以外に誰もいない筈なのに、その頃のことを尾崎喜八詩集に読まれていました。これは不思議なことでした。

シユナイダー氏は哲学的だった書上喜太郎氏により呼び寄せられ

たと知りうれしかった。書上氏についてはまた横さんが山行を共にしたブラヴァント氏のことを聞かされたというたのしい思い出がある。

黒部に入ったのは冠さんが最初といわれているが、それより早く、当時まだ学生だった舟田三郎氏が、専門的研究をするため入ったのが最も古いといひ伝えられている。

出席者 織内、折井、福井、渡辺(正)、進藤、斎藤(建)、国見、田中(千)、安田(平)、木村(悠)、宇津、坂倉、久保、隈部、坂本(正)、関塚、黒木、網倉、岩堀、勝田、大野(悠)、浜田、中、高田、堀川、今井(喜)、沼倉

本講演は第57回三水会例会に特別にお願いした講話である。小笠原氏は元日本山岳会員、士官学校教官で、八ッ峰、冬期槍を初登はんされた。(文責・沼倉)

・三水会、第二回

ヨードルとワインの夕べ 去る十一月二十一日「ヨードルとワインの夕べ」を持った。一昨年この試みが大好評であったことから、リクエストに応えたものである。

この夜ばかりは、老いも若きもはるか遠くヨーロッパ・アルプスに想いを馳せ、調達あるいは奇進のワイン、幹事苦心のオ

できなければ一人前として扱わな
いくらいだ。こうした点も考え、
革製の紐のスキー靴を是非採用し
たいものだ。充分に履き馴れたも
のが理想で、休憩時間に靴を脱ぎ
足に空気を当てると相当の効果が
ある。

・薄着に慣れる

服装も羽根入りのヤッケなど無
用の長物となる。唯じかに肌につ
ける衣類だけは必ず毛製を採用す
べきだ。遭難者に接すると上のセ
ーターはぬくもっていても肌着は
(綿あるいは合成繊維)がちがら
に肌に凍りつきそのために死を早
めたことがよくわかる。

要は薄着に耐え得るだけの鍛え
方がコツとなり、着膨れて出発し
熱くなったら脱ぐのでは落第と言
ってよい。靴下も薄手のものを
二、三枚重ね、ヤッケも二枚持参
して上手に使い分ける方が能率は
ぐんとよくなる。

大雪山で四日間マイナス三十四
度の寒気に直面したが薄物で充分
だったし、むしろ内地の零下二十
度の方が寒い位だと思った。

私は零下二十度迄は手袋(必ず
毛製)は使用せずヤッケのフード
もおろさない。これは長期の訓練
で完成したものだけに誰にでもと
お勧めはし兼ねるが、コツは耳・
顔・手にワセリンを厚く塗る程度
で充分に耐えられる。

凍傷の予防は杖を運ぶたびに指

ードブルに顔をほてらせ、談笑
はなかなかつきなかつた。

折からの晩秋の名月もこれを
祝福するかの如く、「酔うてる
わーん」と、まばゆいばかりで
あった。

今年も企画します。大方のご

先と握りを伸縮し、足も歩きなが
ら指をつまむ動作を繰返す。最初
に襲われるのは下腹部なので、着
衣の際に毛の靴下でもあてがって
おくことだ。

手袋を使わないのは歩・登・滑
と何れの場合でも杖の握りが不充

お知らせ

図書委員会主催の恒例の催し物
について御案内いたします。お
気軽に御参集下さい。

第11回山岳図書会語る夕

「鳥水の方法」

三月十三日(木)六時三〇分より

近藤信行氏に小島鳥水伝の執筆

と鳥水全集の編集にちなむ新資料

発掘の苦心談などをお話しいた

きます。

第8回山岳史懇談会

「大正期の我が山登り」

三月二十六日(水)六時三〇分

より

麻生武治氏に山と写真など若き

日の山行の思い出話をお聞かせ

いただきます。取っておきの話をと

期待しています。

(図書委員会)

出席者。(高田真哉)

△出席者▽折井、福井、関塚、久

保、入沢、中、進藤、沼倉、広

羽、岩堀、梅野、今井、石井

坂本、斎藤、高見、大野

(参)、高見、片岡、勝田、浜田、

隈部、杉山、高橋、網倉、桂、

分となるのを防ぐのである。ツア

ーも馴れないと脚力だけで歩いて

しまい、降りになると転倒続出と

なる。体全体を使い杖を強く握っ

て歩き、登り、滑らないとツア

ーに失敗する場合は間々ある。

フードをおろさないのも最悪の

珠穆朗瑪峰登山隊宛

郵便物の宛先は次の通り

中華人民共和国西藏自治区

協略児革命委員会転交

日本登山隊

某様

所要日数は航空便で10〜14日

料金は(航空便) 船便は 約一ヶ月

書状 10gまで 100円

10gを越える10gごと

に60円増

書状 20gまで 60円

(船便)

葉書 40円

書状 20gまで 60円

三、隊の編成

二、時期 一九八〇年四月中旬〜六月

下(登山期間四十五日)

一、目的 ①ケダルナート峰(六九四

〇m)の登山

②一部隊員による高所生理

の研究とガルワル地方の

教育関係調査

機会にケダルナート峰の登山を申請、

印度登山財団の許可を得て準備を進め

ております。

日本山岳画協会展覧会

日時 3月4日(火)〜10日(月)

11時〜20時(最終日18時)

場所 新宿駅ビル8F

ギャルリ・アルカンシエル

TEL. 356-2111 内線三三八

東西南北

場面を迎えた時に大きな心の支え
となり、ゆとりを生めるからだだが、
最後は食物よりも暖かみが切望さ
れ、その折にまだセーターやフ
ードが残っていれば、どれだけ力強
い頼りとなるか計り知れない。

(以下次号)

50gまで 100円
100gまで 140円
(珠穆朗瑪峰登山隊事務局)

ガルワル登山について

婦人懇談会は、一九七六年のカメッ
ト日印合同登山以来、研究会の活動を
続けておりますが、昨年ガルワル・ヒ
マラヤ、ガンゴトリ山群の一部解禁を
機会にケダルナート峰の登山を申請、

印度登山財団の許可を得て準備を進め
ております。
計画の概要は左記の通りです。

一、目的 ①ケダルナート峰(六九四

〇m)の登山

②一部隊員による高所生理

の研究とガルワル地方の

教育関係調査

機会にケダルナート峰の登山を申請、

印度登山財団の許可を得て準備を進め

ております。

計画の概要は左記の通りです。

一、目的 ①ケダルナート峰(六九四

洋山岳書古書・新書

信販
通販

- 取扱書・世界全域山岳・探検・紀行・報告書。
- 探求書がございましたらお知らせ下さい。探します。
- 洋山岳書でご用済のものがございましたらお譲り下さ
い。誠実評価。

カタログご希望の方は、郵券¥200分同封ご請求下さい。

堀内章雄

〒151 東京都渋谷区代々木 1-21-9
登山とスキーの店山幸内 ☎370-1100

S L、高本信子(会員番号七六〇四)
清水春美(七二四九)
田中清子(七六五九)
富田由紀子(七九〇七)
根本知子(七九二二)
道向和子(八〇四一)
小倉由美子(八〇四九)
市村洋子(八三三三)
佐元登美子(八六六七)
佐藤知恵子(八六六二)
ドクター一名

上記の内、高本、清水、富田はカメ
ット隊のメンバーであり、印度からも
同隊の隊員一名の参加を予定しており
ます。

四、経費 約七〇〇万円(個人負担)
印度、ガルワル地域に関する情報そ
の他がございましたらお教え下さい。

登山隊の動向は今後会報を通じてお
伝えいたしますが、会員の皆様のご指
導、ご支援を心からお願い申し上げます。
(担当理事 山口)



北海道支部だより

追悼

舟田 三郎氏

亡くなる

元会員舟田三郎氏が亡くなりました。元旦の昼前NHKテレビで冬の槍ヶ岳の登山を放映していたが、終わってしばらくすると麻生武治氏から電話があった。「槍ヶ岳のテレビを見てなつかしくなり、舟田のところへ電話をしたら、暮の三十一日（昭和五十四年）午後一時脳軟化症で三鷹の自宅で亡くなったそうだ。驚いて君のところへ連絡した」とのことであった。一月四日、三鷹市井ノ頭五ノ六ノ七の自宅でしめやかに葬儀が行われた。小笠原勇八、小島六郎氏ら早大山岳部創立当時の山の仲間たちが最後のお別れをした。八十歳であった。

舟田氏は早大山岳部創立当時のメンバーの一人で、わが国における岩登りやスキー登山のパイオニヤーであった。無案内主義を提唱され、大正十一年七

北海道支部忘年会は、十二月十五日（土）午後五時三十分より、札幌の中村屋旅館で開かれ、北海道山岳連盟カラコルム遠征隊のブマリ・チツシユ峰（七四九二m）初登頂の8ミリ映写報告、夏のトムラウシ・カウシナイ沢廻行の話、支部長会議々題の珠穆朗瑪峰

月、槍ヶ岳の北鎌尾根で案内、喜作をつれた板倉、松方、伊集院氏らの学習院OBパーティと張りあったことは有名である。

父舟田虎次郎氏は弁護士で、山登りもされ、明治二十四、五年ごろ鹿島村源汲に一ヶ月ほど滞在し、黒部溪谷探歩の目的で爺岳を越え棒小屋沢まで入ったという。日露戦争後上京し、日野強氏の指導援助のもとにチベットの探検を準備したが、同行者の都合で中止している。虎次郎氏の三男として舟田三郎氏は明治三十二年八月十日大分市で生れる。

父が神奈川県足柄上郡北足柄村に山荘をかまえ、舟田兄弟は小学校時代から箱根や丹沢山に親しんでいた。

東京暁星小学校、中学校をへて早稲田第一高等学校に入学、大正十三年理工学部卒業。大正十一年月、早大山岳部の第一回奥秩父登山に参加。大正三年暁星中学内に学友と暁星山岳会を創設、大正四年一月級友中川嘉一郎氏と玄倉川

計画の話題で賑やかな師走の夜であった。

締め繰りは新たに名誉会員になられた佐々保雄氏の乾杯でお開きとなったが、佐々先生を慕う面々は二次、三次会と日付変更後も活躍する一幕もあったという。

出席者氏名▽松沢節夫、金井五郎、渡部盛夫、柳田涼子、兼平治水、萩千賀、山川力、末岡睦、浅原健蔵、朝比奈英三、佐々保雄、金田一勉、赤石喜恵子、亀井秀子、菅野武士、大塚武、石井忠雅、平野明、小笠原進、萩原勇雄、新妻徹、高沢光雄、浅利欣吉（順不同・敬称略）

会務報告

1月理事会

（1月11日午後6時30分 本会ルーム）

・出席者 西堀会長、折井、渡辺各副会長、宮下、中島、飯野、中川、高木、菅沢、岡沢、小倉鈴木、大森、山口、越田、川上高橋、中村各理事、金坂、小原（略）各評議員

【報告事項】

▽チョモランマ登山について（渡辺）

本計画の準備もほぼ完了し、2月22日に先発隊、3月6日に本隊が発進する。

▽昭和55年度事業計画及び予算案の提出について（飯野）

▽ガルワル遠征について（山口）

婦人懇談会で計画しているガルワル遠征は登山時期を5月に繰上げ実施することになった

▽チョモランマ登山隊壮行会の開催について（中川）

本会主催で2月15日私学会館で開催する。

ルーム日誌

（54年12月）

2日（土）年次晩さん会 支部長会議

3日（月）理事会

6日（木）自然保護委員会

11日（火）婦人懇談会

14日（金）忘年会

15日（土）婦人懇談会セミナー

20日（木）図書委員会

25日（火）婦人懇談会

今日の来室者三五六名

会員移動（12月）

物故

三二一 斎藤氏三郎（45・3・18届12月）

二五四一 藤井 運平（54・12・23）

四二四二 伊丹 捷衛（54・10・27届12月）

支部変更

八五八五 吉田 勝（関西へ）

八〇四八 池田智津子（関西へ）

名誉会員

九六九 佐々 保雄

一二二七 島田 巽

一二五九 水野祥太郎

一六三〇 佐藤久一朗

永年会員

一一〇六 橋本晋七郎

一一一七 今西 錦司

一二二六 片桐盛之助

一二三六 西堀栄三郎

関西支部、図書に関する小史 (つづき)

本部に於て審議の結果、図書費 200 円を削除 800 円に決定したとの通知がきた。そこで支部では次のような支部図書新設資金募集を三理事 (別宮、今西錦、三木) の名を以て支部会員に呼びかけた。

- (イ) 一口を金 5 円とす
- (ロ) 差当り 12 年度山岳関係定期刊行物の購入 (主として海外刊行のもの、但しアルパイン・ジャーナルは三木理事より創刊号以下新刊各号まで現に寄託借蔵しつつあり、また印文雑誌並に出版物は多く寄贈による見込)
- (ハ) 余裕あるに従ってヒマラヤ、コーカサス等主としてアジア州の山岳探検に関する新旧著書に重点をおき購入
- (ニ) 資金の一部をもって書架、その他書籍保管閲覧設備に要

する費用を支弁することあり。

——当年度ルーム来室者 623 名——

昭和 14 年 この年、国民徴用令が公布された。

図書費については前年本部より新予算編成の際削除されていたので支部としては早速図書基金制を設けて海外登山界の情勢捕捉及研究に過誤なきよう努めていたのであるが前年既に購入済の分について本部の瞭解を求めんとしたのであるが断られてしまった。

(宮崎氏購入洋書 35 円 1 銭)

参考までに当時の会計決算額は

昭和 12 年度 851 円 38 銭

昭和 13 年度 940 円 51 銭

昭和 14 年度 856 円 55 銭

昭和 15 年のルーム来室者 1,827 人

● 語句の正誤

会報四一五号一ページと七ページに山水会とありますが、これは三水会の誤りです。また四一五号の七ページ四段五行目にある奇襲登山は避衆登山の誤りです。訂正してお詫びいたします。

昭和五十五年二月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五一四

サンビュウハイツ四番町

発行所 法人 日本山岳会

発行者 西堀栄三郎

編集代表 岡沢祐吉

電話東京 (四三) 四四三三

振替口座東京三一四八二九番

東京都港区赤坂一丁目三番六号

印刷所

株式会社 技報堂